

〈よろめき〉によって齎された魂の変化

——三島由紀夫『美徳のよろめき』について——

セリンジャー（朝さろん）

朝さろんの本棚〈65〉…2017年2月12日（日）

〈名作から／について、考える〉

1 名作から／について、考える

《「名作」と呼ばれる作品たちを、既成の評価をいったん脇において、ゆっくりと堪能してみよう。「(哲学的な) 対話」と「(詩的想像力による) 読み」と「(文学的な) レクチャー」を一体的にしたのしむ読書会が《朝さろん》です。一冊の作品だけで「ここまで考えられるんだ」という清新な沃野へ、いっしょにピクニックに出かけましょう。とはいえ、あまり堅苦しくならず、小説を読む愉楽に浸りながら、なによりもまず楽しい読書会にしたいと考えています。

2 物語のアウトライン

本作の梗概は次のようなものである。

上流階級のしつけの良い家庭に育った二十八歳の節子は、親の決めた倉越一郎と結婚し男児も一人いた。節子は時折、結婚前の二十歳の頃、同い年の土屋とした避暑地での拙劣な接吻を思い出した。結婚後も、土屋とは偶然に舞踏会や町のレストランで顔を合わすことがあった。やがて節子は土屋と何度か食事をした後、彼と再び接吻を交わした。九年前と比べて土屋の接吻が巧者になっていた。節子は受胎した。もちろんそれは夫の子であった。しかし節子はこのまま生んで、土屋と疎遠となり別れば、土屋の子供でもないのに生まれる子供が恋の形見となることを恐れ、中絶を決めた。節子は

土屋と旅行に行った。友人の与志子に秘密の共謀をしてもらった。与志子にも夫に秘密の恋人がいた。旅立ちの朝、節子は幼い息子・菊夫に対しては羞恥を感じたが、勤めに行く夫を見送るときは耐えやすかった。土屋と結ばれた翌朝、二人は裸でホテルの部屋で朝食を摂った。それは土屋が以前、僕は真裸で食べるのが好きなんだと、節子にレストランで言っていたことだった。

土屋と何度も密会を重ね、節子は肉体的にも深い快楽を覚えた。節子の生活は土屋を中心にまわっていたが、土屋には節子の夫への嫉妬の影もなかった。やがて節子は土屋の子を受胎した。そして土屋に何も告げずに中絶した。節子は菊夫が早く大きくなって、節子を非難してくれればいいと思った。土屋がナイトクラブで違う女と会っていたと聞いただけで、節子は嫉妬に苦しんだ。次第に節子の心は土屋の奴隷のようになっていた。それでも土屋と別れられない節子は知恵のある老人・松木や、元花柳界の老婦人に相談するが、解決がつかない。そんな時、節子は再び土屋の子を妊娠した。食事も喉を通らなくなり衰弱した節子は麻酔なしの手術を受けなくてはならなくなつたが、激しい苦痛に耐えて声も一つ立てなかった。そのため、いざというときの吸入麻酔も使われなかった。

節子は里の父・藤井景安と久しぶりに食事をした。実直な景安は国家の正義を代表するような地位にいた。機知やユーモアはないが寛厚な人柄の父と一緒にいると、機知に疲れた節子は落着いた。話題の中で、父の旧知の人物が今朝、自殺をした話になった。節子は自分のスキヤンダルが、もしも堅実な父親に影響してしまった場合のことをそのニュースに重ね、烈しい恐れにふるえた。

節子は土屋に今までの苦しみを話し、別れを切り出した。土屋は節子を労わり優しくしたが、別れを待っていたかのようであった。別れて数か月後、節子は土屋への手紙を書いた。あなたと別れた後の苦しみ、自分がどんなにあなたを愛していたかを綴ったが、節子

はそれを出さずに破って捨てた。

このような通俗的な、いわゆる姦通を取り扱う筋立てを持つ本作は、「美德のよろめき」を描き出すことを通じてその奥になにを描きだしているだろうか。道徳的な説教や表層的な倫理観の称揚などとは明らかに異なる、本作の醍醐味について考えたい。

3 三島由紀夫とは？

三島由紀夫という作家は次のように概括される。《日本浪漫派の影響を受ける一方、ギリシア以来の西欧的知性に裏付けられた古典主義的様式を特徴とし、悪や死の香気のなかに唯美的なナショナルイズムを追求した作家》(『新研究資料現代日本文学』明治書院、第2巻より。以下引用は同書による)。

略歴として《大正十四年一月十四日、東京市四谷区永住町二番地に生まれる。父平岡梓、母倭文重(しずえ)の長男。本名公威。学習院初等科から高等科を経て、昭和二十二年東大法学部を卒業。同年高等文官試験に合格。大蔵省に勤務したが、二十三年に創作に専念するために退職。二十九年「潮騒」で新潮社文学賞、三十年「白蟻の巣」で岸田演劇賞、三十二年「金閣寺」で読売文学賞をそれぞれ受賞。四十年映画「愛国」の制作前後から、独自の天皇観をラディカルなナショナルイズムに傾き、四十五年十一月二十五日「豊饒の海」を完結後、東京・市ヶ谷の自衛隊駐屯地で割腹自決した》。

家庭環境は《祖父定太郎は樺太庁長官などを勤めた明治大正期の高級官僚。父梓も農林省の水産局長まで栄進。祖母夏子は幕府の重

4 「金閣寺」との関連

臣永井玄播頭尚志の孫娘であり、父は大審院判事。母倭文重は金沢前田家の儒者橋家の出身で、父は開成中学校校長を勤めた人。三島の文学的な資質は、祖母の芝居好きと終生三島文学の「最上の読者」であった母倭文重によって形成される。学習院時代、恩師清水文雄は三島の才能を発見し、三島は雑誌『文芸文化』（昭和十三年七月十九年八月）を通じて、日本浪漫派の影響を受けた。人間関係として『文芸文化』の蓮田善明、伊藤静雄、保田与重郎、林富士馬、富士正晴などを知る。戦後、川端康成の知遇を得、文壇にデビューしてから「鉢の木会」の中村光夫、福田恆存、吉田健一、大岡昇平らとつながりを持った。三島の理解者として、林房雄、村松剛、矢代静一、ドナルド・キーン、澁澤龍彦などがいた。作家としての影響関係に『自己改造の試み』（昭和三十一年八月）で、自己の文体の変遷を、新感覚派・堀辰雄・ラディゲ・日本古典・日夏耿之介・スタンダール・森鷗外などの影響を受けたと述べ、〈私は鷗外の文体模写によって自分を改造しようと試みた〉、〈徐々にゲエテやトオマス・マンなどの、ドイツ語そのものの重さから来る文体が、私を魅しはじめた〉と書いて、鷗外の感受性を抑圧した〈清澄な知的文体〉、マンの〈抽象的表現能力の極致〉というべき〈重い文体〉の影響を自ら明らかにしている。

このような背景からもわかるとおり、三島自身はきわめて教養が高く、家柄も申し分ない家庭の嫡男として、大きな期待と社会関係資本を背景に文壇に登場してきた。

本書「美德のよろめき」を連載する直前、三島は代表作である「金閣寺」を連載していた。おそらく「金閣寺」の執筆終わりの頃には、本作の構想や筋立てが考えられはじめたであろう。こうした創作史上の経緯からも、「金閣寺」と本書にはいくつか関連する事項が指摘できる。

磯田光一氏は「金閣寺」執筆に至るまでの三島の脳裏にあった次のような背景を指摘する。

当時二十三歳の新進作家であった三島由紀夫は、人生を既成の様式の模倣ととらえ、自殺とは「死ぬこと」によって終る人生を、人工的に完結することだと書いていた。そして情死について、つぎのよう

（情死が）自殺とちがうことは、ふつうの人生においては男女が同瞬間に死ぬことはまずありえないのに、情死は時を同じうして男と女が手をとりあって死ぬという点で、何ほどか独創的であるわけです。この点で、彼らは単なる模倣ではない人工の行為を通じて、（つまり人生とは別の道をたどって）、別様の天然自然に到達します。ここに於て、心中は芸術的行為であり創造的行為であります。芸術と良い創造と言いますものも、人工が自然の模倣に了らず、一つの新しい自然の創造に関与することにはならないからです。（情死について『新女苑』昭和二十三年九月号）

当時の時代思想の動向は、戦争の惨禍を社会や国家の罪に帰することによって、秩序を破って自我を伸長する方向に人間の未来をみつめていた。これにたいして、情死を「人工」的な「創造的行為」と呼ぶ三島は、なにか黒々とした秘密を語っているように感じられた。この三島の情死論は、人間にあたえられた自然的・社会的条件を否認して、死と引きかえに「精神」の栄光をみていたのである。この思

想は、たんに戦後の進歩思想と対立するだけではない。みずからの生死のかたちを選択することのうちに、人間の“自由意志”の本質をみつめる思想のように、私には思われたのである。

自殺とは、現実の自己のすがたと、あるべき自己”のヴィジョンとのあいだに大きな落差があるとき、前者を抹殺して後者を逆説的に証明しようとする行為である。また情死とは、現世で実現できない男女の精神的結合を“死の同時性”という人工的な観念を利用して、あえて架空の世界に実現しようとするところみである。いずれも現実を否認するという点で、理想主義的、精神主義的な行為といわざるを得ない。三島のエッセーが私を動かしたのは、いわばこういう領域への共感にほかならなかった。

戦後まもなく、焼跡の上に闇市が展開していた時代のなかで、特攻隊がえりの青年が闇屋に転じていったとき、彼らが少なからず三島由紀夫の読者になっていったのは、時代の価値転換のもたらしたニヒリズムを三島がだれよりも深く体現し、人工的な文学空間のうちに“生”と“死”の根拠を求めていたからではなかったろうか。三島のほうでもそういう戦後青年の行動のうちに、しばしば共感をもっていた。それはたとえば、光クラブの学生社長の自殺をえがいた「青の時代」や、京大生の子学生殺しをモデルにした「親切な機械」をみれば明らかであろう。そういう傾向のひとつの頂点として、金閣放火犯人をモデルとした「金閣寺」がある。(磯田光一「三島由紀夫・人と作品」、『昭和文学全集第15巻』より)

「美德のよろめき」では、三島が常々標榜している「人工」的な「創造的行為」とでもいうべきものが、「情死」とはまた異なる形態で問い直されている、あるいはその可能性が試されていると考えられはしまいか。世俗的な道德観からは及びもつかない、妻女の貞淑という美德を揺さぶり、貶めることでのみ新たに顕現する、「理想主義的、

精神主義的な行為」は、「現実を否認」しているという点で「金閣寺」とも相通じるものがある。

5 「金閣寺」と「憂国」

さらに詳しく、次の二つの作品を見てみよう。

「金閣寺」(昭和三十一年一月〜十月『新潮』同月新潮社刊)は以下のような作品だとされる。《作品の素材となったのは、昭和二十五年七月二日の金閣寺放火事件である。三島はこの現実の事件を題材にし、独自の思想や美意識を具象化した。炎上する金閣の絶対美を自らの手で滅ぼすという行為の意味だけを、三島は必要としたのである。《私が人生で最初にぶつかった難問は、美ということだったと言っても過言ではない》と回想する《私》は、戦時下の終末観の中で生の決定的瞬間を望んだが、戦後の絶望と孤独の中で生きなければならなかった。それは三島の精神の履歴を語っているようである。三島にとって美は《人間主義の復活を意味せず、「生の否定」という宗教性を帯びる》(《美について》『近代文化』昭和二十四年十月)ものであり、美と人生とが完全に一体化するのは、その滅亡の瞬間においてであった。三島は結末で《私》に《生きよう》と語らせている。

《私という存在は、美から疎外されたものなのだ》と考えていた《私》は、自己を呪縛し続けた金閣の《未来永劫存在するということ》を語っている永遠》を否定することによって、金閣の支配から逃れ、生の方向へ参加しようとするのである。そこに「仮面の告白」以来の《死の領域》から脱却しようとした三島自身の苦闘のあとが窺われる》(『新研究資料現代日本文学』明治書院、第2巻より。以下引

用は同書による)。

ここで「金閣(＝美)の支配」と言われるものが、「美徳のよろめき」においては世間一般の道徳、規範にあたることは容易に想像がつく。「美徳のよろめき」には、そうした一般的な道徳観を保ったままでは決して理解し得ない、道徳の支配から逃れることで得られる自由、「生の方向へ参加」する様が描かれているといえる。

もう一つ、本書「美徳のよろめき」からのびる射程が、後期の短編「憂国」(昭和三十六年一月『小説中央公論』)である。「憂国」については三島は(ここに描かれた愛と死の光景、エロスと大儀の完全な融合と相乗作用は、私がこの人生に期待する唯一の至福であると云ってよい)(新潮文庫『花ざかりの森・憂国』解説)と述べ、「憂国」の一編が、三島文学の凝縮したエキスであることを自認している。

「憂国」、「十日の菊」(『文学界』昭和三十六年十二月)、「英霊の声」(『文藝』昭和四十一年六月)は二・二六事件に取材した三部作といわれる。(昭和の歴史は敗戦によって完全に前期後期に分けられたが、そこを連続して生きてきた私には、自分の連続性の根拠と、論理的一貫性の根拠をどうしても探り出さなければならぬ欲求が生まれてきていた)(『二・二六事件と私』河出書房新社、昭和四十一年六月)という三島の内部には、その自分の連続性の根拠として神としての天皇があった。昭和史の中で天皇が神であるべき時、つまり青年将校の蹶起の時と特攻隊員が死んだ時こそ、死の瞬間に神と一体になり、死の栄光、死への至福、歴史とのつながりがあると考えたのである。当時十一歳だった三島には、二・二六事件における(神の死の怖い残酷な実感)(以上『二・二六事件と私』)とが密接につながっていた。三島にとつて敗戦はなく、人間天皇はあり得なかった。美的に観念化された天皇のイメージこそ、三島の生涯の純粹な連続性をとらえることができる根拠だったのである。そうした天皇観は(文化の全体性の統括者としての天皇(「文化防衛論」)へ展開していく)。

「美徳のよろめき」でも存分に描かれた節子と土屋のエロス、その背景に太く濃く横たわる死の影であるが、その死の影が二人の姦通の終焉の呼び水ともなる。では、これが姦通でなければ、その強烈な官能性はどのようなものとして描き出され得るか。「理想主義的、精神主義的な行為」として、「現実を否認」するような官能性を獲得するとき、それが「大儀との完全な融合と相乗作用」として現れると考えて書かれたのが「憂国」という作品である。「美徳のよろめき」が貞淑な妻女の不義の恋という通俗的なモチーフを扱う結構ゆえに閉ざされた三島の考える、至上の愛が孕む可能性が、この「憂国」では極限まで押し広げられている。

6 「美徳のよろめき」の多彩な読み

従来「美徳のよろめき」は、作家三島の作品のなかでは中間小説めいた、いわば贅沢な余技のような大衆向けの作品として理解されることが多かった。作者自身もそのような評価を暗に認める、あるいは自ら吹聴するような発言をしているのもその一因であろう。

しかし今日「美徳のよろめき」を読めば、その中に決して古びない普遍的な恋愛模様が考察されていることはもちろん、「金閣寺」や「憂国」といった代表作と比較検証するに足る三島独自のテーマが見え隠れするのもまた確かである。不倫(婚外恋愛)という世俗的なモチーフのみに惑わされず、本作の多彩な読み方を楽しみたい。

北原武夫氏は『美徳のよろめき』について、「(三島)氏が自分の力量を心ゆくまで発揮し、自分の技能をほしのままに愉しんで、丁度声量豊かな大歌手が、お気に入りの聴衆を前にして即興の小曲を歌

い上げるような、気楽にのびのびと「書いている」と評して、三島と谷崎潤一郎の「作家としての生活態度」や「才能の広さ」が似ているとしながら、二人の共通性を、「審美的乃至は耽美的傾向を、果敢にも実生活の中に持ちこみ、よほど確乎とした合理的精神と、習俗を恐れぬ強い意志とがなければ、容易には実行できないこの両者の融合を、何の支障もなく、実にやすやすと実行している」ことだと考察している。そして、そういった作家精神がなければ、『美德のよろめき』のヒロイン・節子のような、「姦通という悪徳を犯しても穢れることを知らない優雅な人間」や、『鏡子の家』の鏡子のような、「どんな時代に汚れにも染まない自由で真率な人間」を持つ、「真の意味で贅沢な魂」は創造できないとし、その筆を見事だと評している（新潮文庫「解説」より）。

小笠原賢二氏は、『美德のよろめき』がその当時の社会の「繁栄」の雰囲気を受吸した娯楽的な大衆小説ではありながらも、一般的理解よりも「難解であり、必ずしも口当りが良いというわけでもない」とし、ヒロイン・節子の、「享楽に身を任せているようではないながら、時代を容易に受け入れようとせず、「むしろかたくななほどに自分の強固な城を築き、現実から一線を引こうとしている」態度や、「優雅に暮し自由にふるまっているか見えながら、本当に人生を楽しんではいない」身振りから窺えるのは、「むしろ苦しい表情」であり、そこには作者・三島の、「サービスのポーズを取る一方で、窮屈で退屈な時代に呑みこまれまいとして構え緊張する表情」が透視されると考察し、『美德のよろめき』は本質的には「反俗的な作品」で、通俗小説風であるにもかかわらず、「これほど時代と合わない作品も珍しいのではないか」と述べている（『幸福』という存在論―『美德のよろめき』を中心に―『三島由紀夫論集』三島由紀夫の時代』勉強出版、2001年より）。

また小笠原氏は、三島が〈内界〉〈外界〉、〈認識〉〈行為〉といった

「二元論の克服」という「難問」、「存在論的問い」を初期からずっと抱え、『金閣寺』では、その難問が不完全燃焼のまま終わり、その問いがそのまま『美德のよろめき』にも引き継がれていると述べ、麻酔なしの墮胎手術を受ける節子が「徹底した受苦の姿勢」の果てに、魂に〈有益なもの〉がもたらされ、〈非凡な女〉となり、〈甘美〉や〈光りかがやくほど充実〉した状態がもたらされる箇所を、〈苦痛〉が「かけがえのない支え」になり、「観念と肉体は不可分に結合」し、「確かな存在の証明」に至った場面だと考察しながら、それを手に入れた節子は、〈幸福〉を見出したため、もう「よろめく」ことはなくなつたとし、『美德のよろめき』は、「美德のよろめき」が克服されるに至る経緯を描いた小説」だと解説している（同前掲書より）。

本書「美德のよろめき」は、貞節な妻・節子が姦通をはじめ、盛り上がり、別れに及ぶまでの心身の変化を一年間に及ぶ季節の移ろいと重ね合わせに描き出している。家庭を飛び出し、そして再び家庭に戻ってきた節子は一見すると以前と同じ位置に留まっているように見える。しかしそこに〈美德のよろめき〉が克服されるに至る経緯を描いた小説」という見方が差しはさまれる余地があるとき、節子の一年に渡る恋愛とその終わりを描くことで本書が何を描き出しているかを解釈するという問いが、読者の前に立ち現れる。節子と共に一年の経緯を旅して来た読者が、そこに何を見るか、という問いである。

節子は第19節でついに土屋と別れる。芯から納得し、望んだ別れであったはずなのに、節子は大きな虚無をその胸に抱えるようになる。その空白を満たす為かのように、節子は土屋に向けて手紙を綴る。その手紙の中で自分の胸中を綴る節子はまさに「節子の中に節子が生れ、目をさました。彼女は愛する男を発見したのである」（第6節）という様だ。しかし既に土屋に別れを告げた後のことである。これはどういふことか。前項までに見てきたように、三島作人

の特徴に「現実を否認」し「理想主義的、精神主義的な行為」によって現実を乗り越えていく傾向があることにも留意すれば、節子にとって《愛》とは土屋という異性ととのあいだに現象するものではないのだろう。彼女はよろめき、土屋という男性と交情することで愛に生きる自分自身をはじめて実感し、主体的に愛に生きることを発見した。三島作品らしい「人工」的な「創造的行為」がここに表現されている。〈現実の自己のすがたをあるべき自己〉のヴィジョンとのあいだに大きな落差があるとき、前者を抹殺して後者を逆説的に証明しようとする行為（磯田光一、前掲書）だといえる。

節子という貞淑な妻女が姦通を経て得たものはこのラブレターに結実する《愛を表現する自分》であり、そのことで生を活性化することだろう。だが、そこには功罪が伴う。墮胎を繰り返して被った身体的なダメージや土屋を喪った反動の虚無がそうである。しかしそうした負の側面も愛に付随する他ならぬ代償であり、こうした功罪を含め愛と自身の生を、主体的に体現することができるようになったひとりの節婦を、われわれ読者は目にするのだ。犠牲なくして生の実感は得られない。自分自身にとつての《愛》のあり方を実感し、生の実感を生活の中に取り戻すことこそが至上命題であり、そのためには世間の美德を侵犯することも時にやむを得ない。「美德のよろめき」は、ラディカルさを秘めた作品だといえるかもしれない。『私の苦しみは、もしかすると、私一人きりのものだったのではないかしら』。すべては私一人の上にとつた出来事だったのでないかしら』（第19節）と自身の来し方をはじめて俯瞰的に捉え直す目を持つたのも別れの経験に因るものであった。次節で再び愛の胸中に没入することからも、そうした『すべては私一人の上にとつた出来事だった』ということすらも肯定的に、むしろ『私一人』ということが大事であったかのように、書かれた手紙は破り捨てられる。第6節で「節子の中に本当の節子が生まれ、目をさました」と、愛を自覚し始

めた裏で自分ひとりが抱える秘密の墮胎があったように、節子の愛にはいつも、どこか『私一人』の陰が差し込んでいたのである。

7 近代日本文学に描かれた多様な《愛》と《美》のあり様

改めて、今シーズンでは川端康成の『雪国』、三島由紀夫の『美德のよろめき』、そして谷崎潤一郎の『春琴抄』を取り上げている。いずれもその作家を代表する作品であり、日本近代文学のなかでも名作と呼ばれる作品である。『雪国』が〈決して満たされない、というよりも満たされてはならない存在への恋を、即物的にも、抽象的にも、また夢幻的にも表現し得る感覚の力〉（竹西寛子、「雪国」文庫解説より）を示していることとまず考えれば、『美德のよろめき』は、道徳の檻を食い破ることで得られた〈生の実相（の悲喜劇）〉を描き出していると言えよう。では『春琴抄』はどうか——。それぞれに固有の特色を結実することで名作となりえていること想像に難くない。三作品がそれぞれに、男女間の愛情や恋愛の機微を濃密に描き出すのと同時に、作家それぞれの固有の探求法に基づき《美》や《美意識》が描き出されてもいる。日本近代の名作に触れながら、三作品を通じて、名作が表現してきた日本的な《愛》と《美》のヴァリアントも鑑賞していきたい。

【あらすじ】

人妻の姦通（婚姻外の恋愛）を描いた作品で、多くの大衆読者を獲得した作品。結婚前の男友達と再会し関係を持ち、官能に目覚めたヒロインが妊娠・中絶を繰り返した苦しみの末に、別れを決心するまでの一年間を描いた物語。フランスの心理小説の趣を生かした文体で、ヒロインの背徳を優雅に表現している。

《初出》一九五七年（昭和三十二年）『群像』四月号から六月号に連載。単行本：一九五七年六月二十日大日本雄弁会講談社より刊行。



【著者プロフィール】

本名平岡公威（ひらおか きみたけ）。1925年（大正14年）1月14日 - 1970年（昭和45年）11月25日）。日本の小説家・劇作家・随筆家・評論家・政治活動家。戦後の日本文学界を代表する作家の一人であると同時に、ノーベル文学賞候補になるなど、日本語の枠を超え、海外においても広く認められた作家。『Esquire』誌の「世界の百人」に選ばれた初の日本人で、国際放送された「番組に初めて出演した日本人でもある。満年齢と昭和の年数が一致し、その人生の節目や活躍が昭和時代の日本の興廃や盛衰の歴史的出来事と相まって、そのため、「昭和」と生涯を共にし、その時代の持つ問題点を鋭く照らした人物として語られることが多い。

代表作は小説に『仮面の告白』『潮騒』『金閣寺』『鏡子の家』『憂国』『豊饒の海』など、戯曲に『鹿鳴館』『近代能楽集』『サド侯爵夫人』などがある。修辞に富んだ絢爛豪華で詩的な文体、古典劇を基調にした人工性・構築性にあふれる唯美的な作風が特徴。

晩年は政治的な傾向を強め、自衛隊に体験入隊し、民兵組織「楯の会」を結成。1970年（昭和45年）11月25日、楯の会隊員4名と共に自衛隊市ヶ谷駐屯地（現・防衛省本省）を訪れ東部方面総監を監禁。バルコニーでクーデターを促す演説をした後、割腹自殺を遂げた。この一件は世間に大きな衝撃を与え、新右翼が生まれるなど、国内の政治運動や文学界に大きな影響を及ぼした。

参加者…8名
進行…芹沢

【会の記録】

感想や意見

感想／疑問点

- ・ 作者はこの作品を書きながらニコニコとしたのしくしていそう。書きながら酔っているのではないか。それくらい書きたいことにも溢れているように感じられた。後半で、一人の人物に滔々と喋らせるなど。
- ・ よろめきというタイトルや内容から予想される昼ドラのイメージとは異なり、けっこうちゃんとした作品。真面目な内容だとおもった。高尚というか。意外だった。物語の組立てがうまい。サラッと書きながら自信ありげに「どう？」と作者に言われているような感じがする。
- ・ 節子が膜のようなものに包まれてふわふわしていて、それを介してしか周囲の人と接していないような、節子がどこにいるのかよくわからない印象が残りました。それが「優雅」ということなのでしょうか？。自分の倫理観が試されているように思った。
- ・ (気になった点)第十二節終盤：「土屋が土屋でなくてはならぬというという愛され方をすればするほど、彼の普遍的な男としての肉体的な役割は重みを増し、土屋はますます無名の男になったのだった」の部分。「その人でなくては」という思いを支えるものは説明できるのか？と気になりました。
- ・ 三島の洞察力はすごいな、と感じた。人生経験が大きく反映されるんだらうなと感じる。
- ・ 上手い、択いな作品だと感じる。そして読者の感情に訴える豊かな起伏がある。真似したくなるような描写や表現にも溢れ、すごいなと思った。
- ・ 主人公節子の独りよがりな様が印象的だった。土屋はダメな男だ

なあと思った。昼ドラのような筋立てなのにラストまでしつかりと持っていくのはすごいとおもった。

- ・ 「金閣寺」執筆後の余技、贅沢な余滴のような作品。貞節の「節」の字を持つ主人公・節子というのが面白い。よろめいても変わらなかつた、彼女の根っこにある「貞節さ」「節度」とは何だろう。
- ・ 聖女というよりは、「幼稚」なだけなのだろうと思われた。有閑マダムの方に。避妊もしないくらい自然の側にいる女性が「考えはじめ」という世界に移っていくのが印象的だった。
- ・ 暇な金持ちがやることはわからないなあとという感想。節子だけが持っている独特の考え方がよくわからなかつた。

「名作」の条件とは？

- ・ 多面的な解釈や読解ができること、と思ったのですが、それって作品側よりも読者側に依るのかなとも思ったりしました。作品と読者の関係を考えて、どちらが先かよくわからなくなってしまう。
- ・ 「名作」と「古典」とは何かが違うのか。「名作」の方は近代のようで、まだ「古典」になっていないものもあるよう。
- ・ 長く、多くの人に読まれている。人間そのものを描いている。根ざしている。
- ・ 共感できるもの。また、感情や現象、モヤモヤを言い表しているもの。本書もそういった要素があると思う。
- ・ 多くの人の心に残るもの。そして長く残るもの。それなりに売れる必要もある、か。
- ・ ポピュリズム。大衆が決めるもので、あまり本質的なものではない？のかもしれない。権威が決めてそれに追随するような。
- ・ 多くの人にとって得るものがある。共感を呼ぶ。多様な考えが多く

浮かぶもの。そういう要素を備えている作品。

・社会的な評価（名作）と、個人が考える評価（名作）とは必ずしも一致しない、異なるものだ。名作がどちらを指すのか、あるいはそうした対立をこえた何か普遍性を備えたものなのか、実はよくわからない。

・普遍性は比較的大多数の人間にたいして、実感を伴った理解ができるかどうかによって判断する。「わかるわあ」と思わせることができるかどうか。

・時代や立場を越えて共感可能な、人間の基本的な「なにか」に触れている、そういうものが名作。

・読み手に、「何度も読み返したい」と思わせるもの。できれば実際に再読をさせるもん。そしてその度毎の再読の中に「発見（再発見）」があるもの。飽くことのない読書体験をもたらすもの。

意見／読解

◆第6節冒頭の「節子の中に本当の節子が生まれ、目をさました」とはどういう意味か。また第6節ラストは「落雷・停電を起すほどの雷は」鳴らないね」として閉じられるが、これはどういう意味か。

・節子が主体的な女性になってきた様子。それまでの家の奥にいる受け身の女性とは異なってきた様子を示す。

・結婚して子供もいるが、愛を知らなかった、ということが逆説的に示されている箇所。

・都会のビル群を歩く節子と土屋にはどこか不穏な、しかし活動的な様がありそれが「爆弾」や「擾乱」というイメージを醸し、後段の停電は食事時のそっけない会話と共に、節子と良人との関係が土屋と対照的であることを示す。

・良人にも土屋にも隠れて墮胎をした節子であり、停電の真相がわからない。秘密が隠されている、という比喻になっているのでは。

・良人との冷めた会話、無関心な様子が示される。

◆土屋との「よろめき」を経て、節子の何が変わったと思いますか。

・不安や苦悩を抱えるようになったところが一番の変化だと思う。嫉妬を覚えた。自ら考えるようになった。また孤独を味わうようになった。

・美徳が揺らぎ、孤独を覚えるようになった。「肉」を覚え、「肉親」である父親を今までと違う目で見えるようになった。

・自己充足的な愛であるが、それでも「愛」を自覚するようになった。「原型に過ぎない」という表現が作中に出てくるが、次第に痩せたように、彼女自身も原形（淑女だったころ）を離れ、変容していったと思う。

・〈美徳〉というのが具体的になにか、その意味をはっきりと確定できない。しかし、道徳的な領域での冒険をし、結果としてなにか変わったのは間違いない。

・作中で3回、都合4回の墮胎を行っている節子にとって一人息子の菊夫は特別な存在。節子は、姦通をしてもそれを非難する資格を良人ではなく菊夫だとしている。唯一の絶対的な正義というか、断罪の執行的な描かれ方をしている。しかし菊夫は第16節でその妄想的役割としてクローズアップされるが以後は急速にしばむ。終章では「理由もなく叱られたり」と、別れて以後の情緒不安定な節子に虐げられるままであり理解に窮する。